

国史跡末松廃寺跡発掘調査現地説明会資料

令和4年11月5日(土)

1 調査の概要

- 調査期間：8月から11月
- 原因：国史跡末松廃寺跡の再整備事業
- 目的：金堂南西隅の調査

末松廃寺跡の再整備に伴う発掘調査は平成26年度から実施しており、調査については有識者によって構成される野々市市遺跡調査指導委員会の指導の下で行われています。令和元年度から令和4年度にかけては寺院の中核となる建物である金堂こんどうの発掘調査を行っており、今年度は金堂の南西部の調査を実施しています。

昭和41・42年に実施された発掘調査成果によると、金堂は7世紀後半に建立された建物と、その後廃絶されたのちに再建された建物の2時期存在すると考えられています。令和4年度は再建された金堂に伴うと考えられてきた、石が一面に敷き詰められた「玉石敷き」について、詳細に調べました。

2 令和4年度の発掘調査成果

発掘調査の結果、この玉石敷きは「掘込地業ほりこみじぎょう」と呼ばれる古代寺院等の建築に用いられる地盤改良工事の痕跡の一部であることが明らかになりました。掘込地業は建物基礎を強固にするために行う、地面を掘り下げたのちに粘土や砂、礫などを突き固めながら埋め戻す地盤改良工事で、屋根に瓦を葺くなど重い建物を建てる際に多く用いられます。

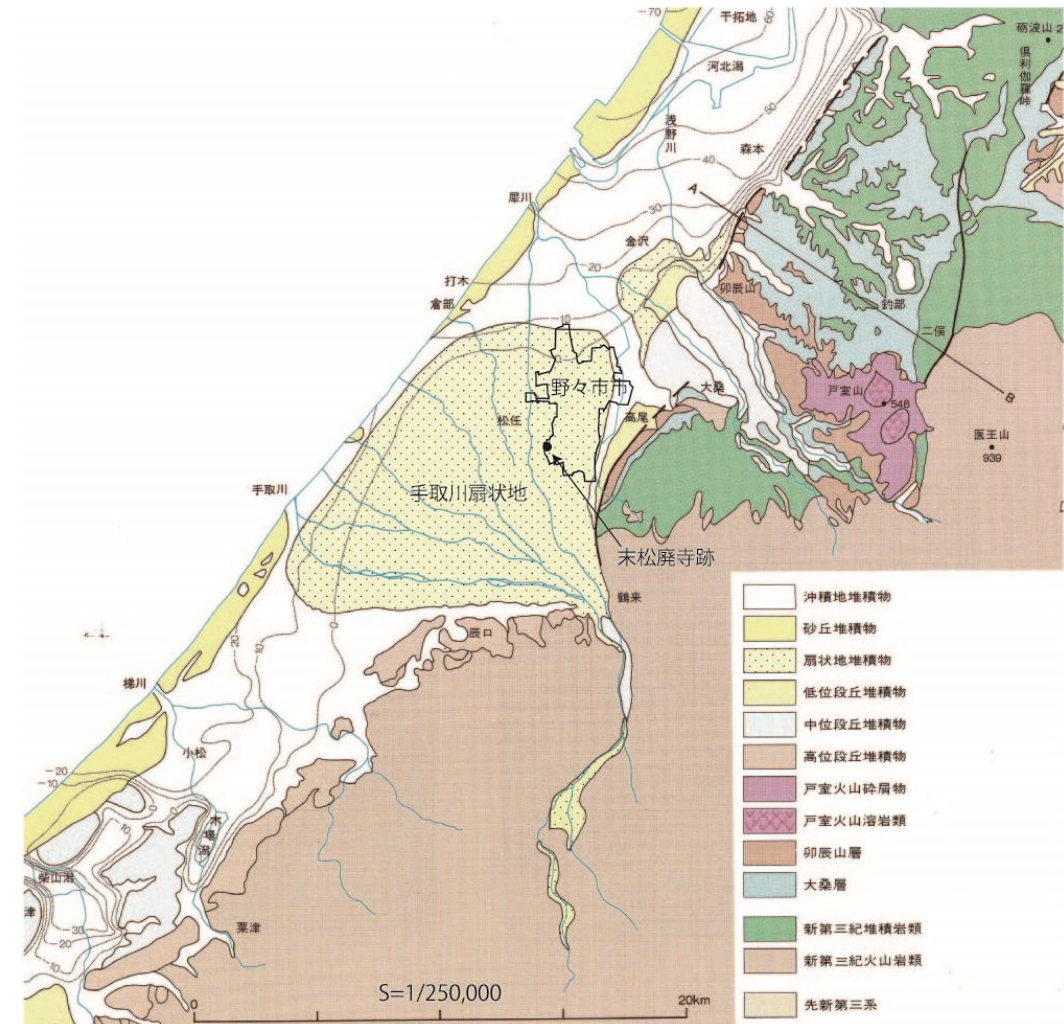
末松廃寺跡で見つかった掘込地業は東西約15m、南北約12mの範囲で地表面から約80cm以上掘りこまれ、(範囲・深さは調査結果から推定)、その内、掘りこまれた底から約60cmの高さで東西13.5m、南北10.8mの範囲で石が密に並べられた層が設けられています。

礫を用いた掘込地業は全国的に類例が少なく、特に金堂を建てる際に施工された例は稀少です。また、拳大から人の頭ほどの礫を建物範囲のほぼ全面にわたって密に敷き詰めたことが末松廃寺跡金堂の掘込地業の特徴です。

この礫は、いずれも河川によって流され角が丸くなった河原石と考えられます。末松廃寺跡を含む野々市市は手取川扇状地上に立地しており、地中深くには手取川によって白山から運ばれた大量の土や礫が埋まっています。この掘込地業は、大きな礫が身近にあり集めやすかった古代の人々が、建物を強固にするために創意工夫した痕跡と想像できます。

また礫を基壇や掘込地業に敷き込む例は、新羅しらぎ(現在の朝鮮半島東部)の寺院に多く、新羅が朝鮮半島を統一し倭やまととの関係が密接になる7世紀後半以降、日本列島に導入された可能性が指摘されています。(古代の土木技術に詳しい國學院大学の青木敬あおき たかし教授より教示)

今年度の発掘調査で見つかった玉石敷きは、従来再建された金堂に伴うものと考えていました。今回の調査によって大規模で丁寧な掘込地業に伴うものであることが明らかになったことで、寺院創建当初の金堂である可能性が浮上しており、今後も慎重に調査を進め末松廃寺跡の金堂が建てられた経過について検討する必要があります。



末松廃寺跡の立地
(絆野義夫編 1993 『石川県地質図』を基に作成)



発掘調査の様子



末松廃寺跡復元模型(北から)



令和4年度調査区全景（南から）



掘込地業の堆積

黄白色の土と黒褐色の土が縞状の層になり、棒状の道具等で突き固めたと考えられる痕跡が残っています

